2

確かな情報を伝えるために

二次元コードから、関連資料や振り返りシート、**知識・技能デジタルドリル**（語句・漢字）などの学習コンテンツにアクセスできます。

３つの教材を有機的に組み合わせた学びを通じ、**目標とする言語能力を身につけていく**ことが、単元扉で視覚的に明示されています。

どのような教材を学んでどのような言葉の力を身につけるか、という**学びの構成図**を、単元の冒頭に見開きで図示しました。

この単元の内容と構成

情報を吟味する力

★★★

情報の編集について考える。

情報はつくられる

| コラム |
メディアとのつきあい方

情報と適切につきあう力

★★★

筆者の考えを知り、
自分の考えとの共通点を探る。

ひとまず、信じない
押井守

| コラム |
引用について

情報を適切に編集する力

★★★

自分の考えをスピーチする。

情報を編集し、的確に発表する
――パブリックスピーチ

確かな情報を伝える力

表現テーマ例集
メディア・リテラシー

語彙
メディア・リテラシー

振り返る

学びを深める
情報と身体　吉岡洋

それぞれの教材の学習・言語活動をとおして、**最終的に目標とする言語能力を身につける**ことを目指します。

確かな情報を伝える

情報を吟味する

単元最初の教材は、短い文章や写真・イラストを題材としており、**単元の学習にスムーズに入っていく**ことができます。

❗何の写真だろう？

★★★ 学習活動

1 「情報はつくられる」とはどういうことか、説明しよう

情報はつくられる

二〇一九年、南米アマゾンの熱帯雨林で、大規模な火災が起きた。右ページの写真のうち上の二枚は、その様子を撮影した衛星写真と報道写真である。

その際、広がる火災を写したとされる写真がインターネット上のソーシャルメディア（個人の情報発信メディア）で拡散した。しかし、写真の中には数十年前に撮影されたものや、さらにはブラジル以外の国で発生した火災を写したものもあることが明らかになった。

拡散が特に多かった写真の一つに、右ページ下の、息絶えたように見える赤ちゃんを抱くサルの写真がある。だが、この写真は二〇一七年にインドで撮影されたものだった。カメラマンは取材に対し、写真の赤ちゃんは倒れかかっていただけだったと説明している。

また、森林の広範囲が火に包まれ大量の煙が立ち上るさまが写った画像で、ある俳優が自身のソーシャルメディアに掲載したところ、百万件以上の「いいね」（肯定的な反応）を集めたものがあった。しかし、この画像は、一九八九年に写真通信社のカメラマンが撮影したもので、二〇〇七年にイギリスの新聞社が掲載したアマゾン森林伐採に関する記事でも使用されていた。

この第２単元では、「情報の伝わり方・受け取り方」をテーマとして、印象的な写真とその実際、という**ＳＮＳ時代にも通じる国語学習**をおこないます。

コラム

メディアとのつきあい方

新聞によって私たちは、遠く離れた場所で起きたできごとを翌日には知ることができるようになった。ラジオによってそれは同時性を獲得した。テレビは、その場のリアルな映像を届けることも可能にした。さらに、インターネットの誕生と普及がもたらしているのは、誰もが発信者になれるという、これまでにない環境である。

ソーシャル・ネットワーキング・サービス（social networking service＝SNS）は、インターネット上で個人が情報を交換するしくみの一つだ。何気なく「つぶやいた」言葉が思わぬ反応を呼び、反応の連鎖を引き起こし、情報がたちまちに拡散する場合もある。この際、情報はたんに客観的なものとして広がるわけではない。「重要だ」「おもしろい」「感動する」「憤りを感じる」など、さまざまな反応がまとわりついていく。

こういったSNSと他のメディアとは、どこが違うのだろうか。次の各メディアと比べ、その特徴を明らかにしてみよう。その上で、SNS、また、その他のメディアとどのようにつきあえばよいか考えてみよう。

- 新聞
- ラジオ
- テレビ
- インターネットのニュース

いま一度、目の前の情報の確からしさを疑ってみて、あなたに求められている情報の目利きをする力（メディア・リテラシー）について考えてみよう。

本教材の後に、テーマに関連したコラムを配置しています。**教材をとおして身につけた力の確認・振り返り**に役立ちます。

確かな情報を伝える

情報と適切につきあう

★★★ 学習活動

1 次の文章を読んで、情報と適切につきあう方法について話し合おう。

これから取り組む学習活動を冒頭に提示することで、**ねらいを意識しながら教材に入る**ことができます。

ひとまず、信じない

押井守（おしい まもる）

自分が知覚しているこの現実と、本当に自分が生きている現実が同じものであるという保証はどこにもない。ある解剖学者が話していたが、人間の脳自体が、この世界をバーチャル[1]に理解しているので、何が現実なのかということは、人間には実証できないのだ。確かに今、僕の目の前にコップがある。どうしても、そこにコップがあるとしか思えない。しかし、そのことも僕の手先に伝わるコップ

▼問 「自分が知覚しているこの現実と～保証はどこにもない」とあるが、なぜか。

1 バーチャル virtual 仮想の。

知覚 読 覚える・覚める

実証 注 実相

効果的なイラストや図版が、文章の理解を助けるとともに、教材への興味を喚起します。

映画「GHOST IN THE SHELL／攻殻機動隊」より

の感触と、僕の目に映るコップの色形を感じただけのことで、その視覚と触覚自体がニセモノの情報だったとしても、知覚している僕にはそのことに気づけない。

犬や虫たちは、どうも人間とは違うようにこの世界を認識している。虫たちの複眼には花の色は違って見えている。彼らは僕らが見ているように、世界を認識していないかもしれない。同じものを見ても、違うように見ているのだとしたら、緑で覆われた美しい山並みという景色も、実は現実なのかどうかが疑わしくなってくる。その考えをさらに押し進めれば、人間の脳にリアルな夢を見せることができたら、もはやそれがその人間にとっての現実となってしまうのではないか、ということだ。それこそ過去のSF作品が何度も描いてきた世界ではないか。

❷ SF science fiction 通常の時間と空間の枠組みを超えたできごとを科学的仮想に基づいて描いた物語。空想科学小説。

本当はすべて夢を見ているだけなのかもしれない。そして仮にそうだったとしても、それを確かめることはできないのだ。夢の中の知覚のみが僕らのすべてであるならば、夢の外のリアルに触ることができないからである。つまり、ある意味では僕らの接する情報のすべては、脳が知覚しているだけという点でいうと、初めからフェイク❸なのだ。

もちろん、僕は今のような話をもってして、インターネットがよくないほうへ進んでいるかもしれないという危機感を茶化すつもりはない。だが、「情報なんてフェイク」くらいのニヒリズム❹でも持っていなければ、フェイクニュースに足をすくわれるということは言いたい。それが今のネットの根本的な問題ではなかったか。

実は、リアルタイム❺で真実を追求するというインターネットの構造そのものが、フェイクニュースを生み出す仕組みになっている。今のように世界が衛星回線とインターネットでつながり、地球の裏側で起きたことを瞬時に知ることができるということは、一見、便利なことのような気もする。しかし、そこには大きな落とし穴がある。

❸ フェイク fake にせもの。

❹ ニヒリズム nihilism 虚無主義。否認の思想。

▼問 「今のネットの根本的な問題」とは何か。

❺ リアルタイム real time 即時。同時。

▼問 「大きな落とし穴」とは何か。

＊語句 茶化す／足をすくわれる

覆われた 読 覆す

追求 注 追及・追究

スムーズな読解につながる発問を、適宜配置しています。

文章教材には、言語活動を通じて内容理解をおこなう**「情報を整理するために」（手引き）**を配置しています。

戦争の映像をリアルタイムで見ることと、戦場で何が起きているかを知るということは、まるで違うことだからだ。特に映像として切り取られたものは、戦争という現実のごく一部にしかすぎない。これは映像だけの話ではない。仮に現地にいる人間がSNSで何かを発信していたとして、それは、その人物が知りえた情報でしかない。

情報発信している人間が、将軍なのか、一兵士なのか、民間人や難民なのか。それによっても情報の信頼度や中身は大きく変わってくる。あるいは、そのSNS情報そのものが、何かの意図をもって流されたニセ情報である可能性も捨てきれない。外界と人間の脳の間で起きえる情報の*改竄（かいざん）と同じようなことが、SNSの情報を受け取る我々と戦場の間で起きている、ということだ。*荒唐無稽に思えるそんな話が、実は脳の外で起きているかもしれない。考えてみれば、これは怖いことである。

ネットの登場によって、すべての人類が情報を共有することができるようになり、立場を超え、国境を越え、同じ土俵で問題に向き合うことができるようになった。そういう輝かしい時代をインターネットが切り拓（ひら）いた、などと考えている人間がいるとしたら、それはかなり控えめに言っても、無自覚にデマゴギー❻をまき散らす存在である。そんなことが本当に可能な世界が来ると考えていること自体が、大いなるフェイクなのである。

インターネットの出現は、個人が手にできる情報の精度を、それまでよりも*格段に落としてしまった。一見、便利で使い勝手がよいネットは、情報から人々を遠ざけてしまった。そのことに早く気づくべきである。▼

❻ デマゴギー demagogie
根拠・確証のないうわさ話。デマ。

▼問「ネットは、情報から人々を遠ざけてしまった」とはどういうことか。

*語句
改竄／荒唐無稽／格段

土俵 読 米俵
精度 読 精進

押井守 おしいまもる
一九五一（昭和二六）年〜。東京都の生まれ。映画監督、アニメーション演出家・小説家・脚本家・漫画原作者・劇作家・ゲームクリエイター。主な監督作品として「うる星やつら オンリー・ユー」「機動警察パトレイバー the Movie」「GHOST IN THE SHELL／攻殻機動隊」などがある。本文は『ひとまず、信じない』（二〇一七年）によった。

情報を整理するために

・「ひとまず、信じない」とあるが、なぜ「ひとまず」なのか説明してみよう。

２単位時間の中で**読解と言語活動をバランスよくおこなえる**よう、本教材には短めの文章を多く採録しています。

段階を追って活動に取り組むことができます。
資料編へのリンクも役立ちます。

確かな情報を伝える

情報を適切に編集する

★★★ 学習活動

1 情報を適切に扱うにはどうすればよいか、「情報はつくられる」「ひとまず、信じない」なども参考にしながら考えよう。
2 自分で調べた資料を加えて考えをまとめよう。
3 まとめた自分の考えを三分間で発表しよう。

パブリックスピーチをしよう　聞き手を意識したスピーチ

スピーチをする機会は、誰にでも訪れる。せっかく人前で話す機会を得たからには、自分の伝えたいことが伝えたいままに伝わり、なおかつ、相手に影響力のあるスピーチをしたい。

では、大勢の人の前でスピーチをする時、どんなことに注意したらよいだろうか。聞き手の立場に立ったわかりやすい話し方の基本をおさえた上で、三分間のパブリックスピーチに挑戦しよう。

活動中心の教材では、学習活動の手順や過程を丁寧に提示しています。

❶ 原稿づくりのポイント

資料編235ページ「関連づける」

話す内容の構成は、次のような型を意識してみよう。

はじめ（序論）　テーマを伝える／聞き手の共感を得る

なか（本論―引用と考察）　言いたいこと（結論）の根拠・理由・事例を三つほど用意する

おわり（結論）　自分の考えを述べ、全体を締めくくる

こうすることで、聞き手は、話し手がどんな内容をどんな観点から話そうとしているかが把握でき、核心に焦点を合わせやすくなる。なお、一文が長すぎると聞き手が話の流れをつかみにくくなる。短い文を積み重ねていく話し方は、呼吸の間も取れて、話にリズムが生まれる。

❷ 話し手のポイント

原稿がまとまったら、話す前にスピーチ内容を確認し、イメージトレーニングをしてみよう。原稿の棒読みにならないように、声の大きさ・速さ・高さ・間などを意識的に変化させてみる。また、相手に伝わるスピーチにするには、聞き手が大勢であっても、一人一人に向き合っているかのようにして話す。

例えば、一つの文の句点（。）までを一人に目を合わせて話し、そのあと別の一人に視線を移す。こうして、文章を区切りながら視線を動かすことで、聞き手の注意を引きつけ、信頼を得ることにつながる。

❸ 聞き手のポイント

聞き手は、話し手のほうに体を向け、うなずきながら聞く。相手が話しやすくなるようにしてあげよう。また、スピーチ後の質問では「なぜそのように考えたのですか」「もう少し詳しく話してください」など、相手のスピーチ内容をふまえた議論の展開を目指そう。活発な対話によって、話し手・聞き手、双方の思考を活性化させることができる。

単元の内容に関連したキーワードを紹介しており、**表現活動の際の指針**として参照できます。

表現テーマ例集

メディア・リテラシー

情報の確かさを保証する上で，唯一の正解はない。ゆえに，情報を受け取る側の目の確かさが問われる。メディア・リテラシーを高めるとは，自分の鑑識眼を精緻にするということである。次のようなテーマについて，書いたり，発表したり，話し合ったりしてみよう。

? フェイクニュースにだまされないためには？

本単元でも扱ってきたように，世界中にフェイクニュースがあふれている。しかし，どれがフェイク（嘘）でどれがファクト（事実）なのかがわからないのが実状である。では，どうすればフェイクニュースにだまされないで済むのか，自分にできることを考えよう。

? メディアの役割とその変化って？

新聞・ラジオ・テレビ・インターネットと，この百年ほどを振り返っても，さまざまなメディアが覇権を争ってきた。そもそもメディアとは，何かと何かを媒介する仲立ちのことである。メディアの歴史を振り返りながら，それぞれの役割の変化をまとめてみよう。

? スマートフォンをどう活用する？

かつてスーパーコンピューターを使わなければできなかったようなことが，いまや私たちのてのひらに収まった端末で実行できる。では，私たちの体の一部とも言えるものになったその道具を，いったいどのように使うべきなのだろうか，考えてみよう。

考えるためのプロセス

- □ 問いについて，まず今の自分の視点から考えてみる。
- □ 次に違う視点から考えてみる。調べたり，話を聞いたりする必要がある。
- □ その上で，もう一度考え直してみる。

発表や話し合いの具体例を、**組み立てや構造がわかるように**示しています。

学習活動のヒント

【発表原稿例】

はじめ
言葉の定義をまとめ，これから述べることの概要を整理する。

● 原まさみです。発表を始めます。
フェイクニュースとは，本物を偽った虚偽のニュースのことを言います。1994年，ルワンダの大虐殺を引き起こしたのは，フツ人主体の政府軍や民兵がラジオ放送に扇動されたからだといわれています。フェイクニュースが社会を混乱に巻きこむ恐ろしさは，インターネットが発達した今の社会も無縁ではありません。

事例 ❶
事例を取りあげ，何が起きているのかを紹介する。

● 2019年，ソーシャルメディアのユーザーらは，共通のハッシュタグを用い，世界最大の熱帯雨林であるアマゾンで森林火災が急増していることに怒りを表明しました。しかし，その時に使用された写真の大半は数十年前に撮影されたものや，さらにはブラジル以外の国で発生した火災を写したものであることが明らかになっています。

事例 ❷
事例を取りあげ，背景にある問題点を指摘する。

● また，SNS上における十年分のツイートを分析した結果，嘘（うそ）が真実よりも速く広まるだけでなく，私たち人間が嘘を広めている，という研究成果が発表されています。どのカテゴリーにおいても，嘘は真実よりも速く，早く，深く，広範囲に広がっていったのです。

引用
問題点に対する識者の意見を紹介する。

● このような問題に対して，映画監督の押井守（おしいまもる）は「リアルタイムで真実を追求するというインターネットの構造そのものが，フェイクニュースを生み出す仕組みになっている」と警鐘を鳴らしています。なぜなら「自分が知覚しているこの現実と，本当に自分が生きている現実が同じものであるという保証」はどこにもなく，「何が現実なのかということは，人間には実証できない」からです。

考察
引用などをふまえ，導かれる考えをまとめる。

● よくいわれるように，ある情報の事実性に疑いをもち，それを確かめるファクトチェック（事実確認）は確かに役に立ちます。しかし，多くの人が指摘するように，ファクトチェックをネットで見かける全ての情報に対して行うことは，時間的に不可能です。加えて，チェックするのは基本的には疑わしいと思った情報であり，疑いをもたない場合や事実だと思った場合，チェックを行うことはまずありません。

おわり
ここまでの記述をふまえて，自分の考えを述べる。

● フェイクニュースの拡散を防ぐために，私たちは，自分自身が特定の「フィルターバブル」の中にいる可能性を意識し，自分にとってもっともらしい情報にこそ気をつけるべきなのです。
以上で発表を終わります。

教材を通じて身につけた知識や能力を、言語活動をとおして確認します。**観点別評価**にもつながります。

振り返る

❶ 情報との適切なつきあい方について、「ひとまず、信じない」の筆者の考えをまとめよう。

❷ 情報との適切なつきあい方ができているかどうか、自分の考えをまとめたり、発表したりしよう。

学びを深める

「情報と身体」を読んで、「本当の情報リテラシー」（61・上4）とは何か、考えてみよう。

語彙

メディア・リテラシー

【フェイクニュース】 マスメディアやソーシャルメディアなどで、事実と異なる情報を報道する、あるいはそのような報道を行うメディアそのものを指す。虚偽であるとわかった上で行う架空報道や、推測を事実のように報道するなど、故意のものについては捏造報道とも言う。

【サイバーカスケード】 インターネット上で、同様の意見・感想をもつ人々だけが集まり、極端に偏った方向に意見が集約され、自分たちと反対側の立場を無視・排除するようになる現象のこと。

【エコーチェンバー】 閉鎖的な空間内でのコミュニケーションを繰り返すことによって、特定の信念が増幅または強化される状況の比喩を指す。もとは、密閉された音楽録音用の残響室のこと。

【フィルターバブル】 インターネットの検索サイトなどの各ユーザーが見たくないような情報を遮断する機能（フィルター）により、「泡」の中に包まれたように、自分が見たい情報しか見えなくなること。

各単元のテーマに関連するキーワードを提示しています。

「学びを深める」は、単元で取り上げた題材に関連した、**読み応えのある文章**です。

学びを深める

情報と身体

吉岡洋

世界が、とても狭くなってしまった。

ここには二つの意味が含まれている。第一に、メディアの発達によって、世界のさまざまな場所で起こっているできごとを、簡単に知ることができるようになった。新聞、写真、電話、映画、テレビ、そしてインターネットのおかげで、空間的距離や時間的遅れはどんどん縮小されてゆき、その結果世界は確かに「狭く」なった。メディアの中では、自爆テロもオリンピックも国会での証人喚問も、あたかも目の前で繰り広げられている一連のショーのようだ。それらは悲しみや怒りや喜びといった強い感情を引き起こすけれど、自分自身は日常生活という「観客席」に座ったままなのである。

これは未曽有の状況である。人間は長い間、自分が住む小さな共同体＝ムラの外で何が起こっているかを確かめるには、旅に出るほかはなかった。「旅」とは身体がリアルな時空間の中を運動することであり、その運動を通して世界を経験することである。これは、生き物として自然なことでもあった。一方メディア環境においては、身体の運動なしに世界についての知識が獲得される。そこでは、より多くの情報を得るためには、より長くモニター❶の前に座っていること、つまりできるだけ身体を動かさないことが必要になる。そこでは知覚と運動とが分離されている。その意味で、生き物として大変無理なことを強いられているわけだ。

さて、そのようにして膨大な情報にさらされているぼくたちは、これまでよりも世界をオープンに経験しているだろうか？　とてもそうは思えない。インターネットによって誰もが直接「世界」にアクセスできるはずなのに、ほとんどの人が仕事以外にやっているのは、仲間うちでメールを交換し、国内のごく限られたウェブサイト❷を眺め、掲示板でおしゃべりすることである。情報ネットワークは、それがただ存在するというだけでは、未知の人々どうしの出会いなど生み出さ

単元の学びの最後に配置することで、**発展的・探究的な学習に活用する**こともできるようになっています。

ない。むしろ現在のインターネット環境においては、人々は情報を既製品のカタログのようなものとして経験するし、人間どうしの出会いすら、もはや思いがけないできごとではなくなり、一定の手続きに変えられてしまう。

これが、世界が「狭く」なったということの、二番めの意味である。情報ネットワークの中で、人々はますます狭い世界の中に安住するようになってしまったのだ。八〇年代末、オタクということがよく話題にのぼった。現在、多くの人が❸マニアという意味でのオタクになったということではないけれども、オタク的な心性は社会にしっかり根をおろしたようにみえる。すなわち人々は、外の世界「について」の言葉やシンボルを操作するのは巧みだが、自分の世界「の中で」それらを意味づけようとはしない。まるで「❹幽体離脱」のように、知識と身体とを切り離す術を習得してしまったのである。

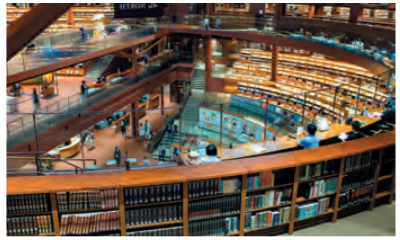
かつては、僅かな情報を手に入れるために、図書館に通ってかたっぱしから資料を調べたり、注文した外国雑誌を何か月も待ったりしなければならなかった。それは確かに、とても不便なことであった。けれどその「不便さ」がある意味では、情報の意味をゆっくり考える猶予を与えてくれていたともいえる。また、ある種の情報が手に入りにくいことは、それを獲得し自分のものにしようとする強い動機づけになってもいた。逆説的に聞こえるかもしれないが、そうした「効率の悪さ」が、とても複雑な意味の場を形づくっていたのである。長い時間のかかる作業は人にいろいろなことを考えさせたし、その途中で思いがけないものが見つかったりした。それに対し、探しているものがすぐ見つかる情報空間とは、裏をかえせば「単に探しているものしか見つからない」退屈な場所だともいえる。

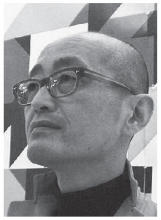
こんなふうにいったからといって、昔を懐かしんでいるわけでは決してない。そうではなく、人間が常に身体を伴った存在であること、情報に意味を与えるのはこの身体を通してしかありえないことを、いま一度思い出そうといっているだけだ。インターネットにどっぷり浸りきるのも、逆にそれを拒絶するのも得策とは思えない。大切なのはむしろ「頻繁にスイッチを切る」習慣かもしれない。メディアという「観客席」からサッと立ち上がってはまた戻ってくること。電子的空間と身体的現実との間の往復運動に、自分なりの軽快なリズムを見いだすこと。それこそが本当の情報❺リテラシーだ。❻IT革命も行きづまった今こそ、情報通信技術が人間にとってなんの役に立つのかを、産業や専門家任せにせず、日常生活の「中から」考えていく絶好の機会なのである。

❶**モニター**　monitor　コンピューターの表示装置。ディスプレーともいう。
❷**ウェブサイト**　website　インターネット上で、一冊の本のようにひとまとまりの情報がおかれている場所。
❸**マニア**　特定の分野・物事に対してのめり込んだり、関連品または関連情報の収集を積極的に行ったりする人。
❹**幽体離脱**　魂が肉体から抜け出るとされる現象。
❺**リテラシー**　literacy　ある分野に関する知識やそれを活用する能力。
❻**IT革命**　revolution of information technology　情報通信技術（IT）の革新によって、経済をはじめとする地球規模での社会システムが大きく変化していく動向のこと。産業革命に倣って呼ばれる。

読みナビ

□「ここには二つの意味が含まれている。」（59・上2）とあるが、「二つの意味」をそれぞれまとめてみよう。
□「逆説的に聞こえるかもしれないが」（60・下4）とあるが、ここでの「逆説」とはどのようなことか、説明してみよう。
□「情報に意味を与えるのはこの身体を通してしかありえない」（60・下16）とはどのようなことか。「情報」「身体」「旅」を関連づけて考えてみよう。





吉岡洋 よしおかひろし
一九五六（昭和三一）年～。美学者。著書に『〈思想〉の現在形』『情報と生命』などがある。本文は「朝日新聞」（二〇〇二年三月一五日夕刊）によった。

内容理解の手引きとして「読みナビ」を配置。**主体的な学び**をサポートします。

ブックガイド

単元末にはブックガイドを配置し、**多様なジャンルの読書**へといざないます。

表現にかかわる本

『わかりやすく〈伝える〉技術』
池上彰

ジャーナリストの筆者が、豊富な経験をもとに、さまざまなエピソードをまじえながら「わかりやすさの技術」を紹介する。

『ことばだけでは伝わらない』
西江雅之

「見た目」や「伝え方」だけではない「伝え合い」という考え方で総合的に捉えた、コミュニケーション入門。

『他者と働く』
宇田川元一

人と人との「わかりあえなさ」を解決するために、相手との溝に橋を架け、新しい関係性を構築することの重要性を説く。

教材にかかわる本

『ひとまず、信じない』
押井守

ネットやサイバー攻撃などを扱う映画を世に送り出してきた著者が、手にした情報に対して自らの頭で考えることの大切さを説く。

『うわさとは何か』
松田美佐

ネット社会となった現代も人々を魅了し惑わせる「最古のメディア」であるうわさを通して、情報とのつきあい方を考える。

『未来の地図帳』
河合雅司

二〇四五年の日本人はどこに暮らすのか。「日本の地域別将来推計人口」のデータをもとに予測した、未来のための手引き書。

単元のテーマにかかわる本

『日本社会のしくみ』
小熊英二

改革が何度も叫ばれながらもなかなか変わらない「日本社会のしくみ」を、雇用慣行に着目することで解明していく。

『社会学史』
大澤真幸

アリストテレスからカンタン・メイヤスーまで、知の巨人が産み出した思想を網羅的にたどり、社会学の歴史を一望する。

『ミライの授業』
瀧本哲史

全国の中学校を訪れて開講した特別講義「未来をつくる5つの法則」のエッセンスを凝縮。「なぜ学ぶのか」の疑問に答える一冊。

各単元の関連図書を、**「表現」「教材」「単元テーマ」に分けて**紹介します。

資料編の「思考の方法」一覧では、「比較」「分類」「仮定」「抽象化」など９項目を、**図解を用いて簡潔に**まとめています。

「思考の方法」一覧

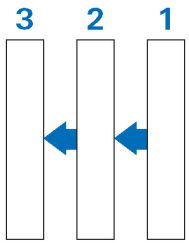
「思考の方法」は、実際に物事を考える場面では、いくつも組み合わせて用いられます。話す・聞く・書く・読む活動の中で、まずは意識することが重要です。意識しながら繰り返し活用して、場面や状況に応じて自由に使いこなせるようにしましょう。

思考の方法 順序立てる

まず……。次に……。最後に……。

第一に……。第二に……。第三に……。

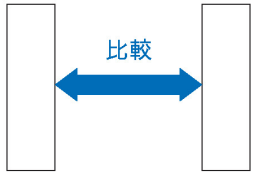
○○の順に並べてみると……。



順序を整理したり、並べ替えたりすることによって、内容のまとまりや全体の流れが捉えやすくなり、考えを整理できる。

思考の方法 比較する

○○と□□を比べると……。



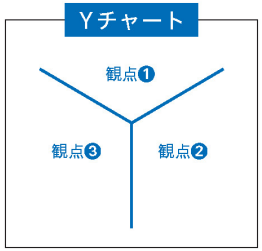
二つ以上のものを互いに比べ合わせることで、同じところや似ているところ、違うところをはっきりさせることができる。

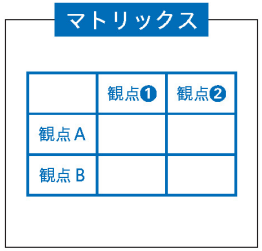
どのような点で比べるかという比較の観点を明らかにしておくと、考えがより詳しく確かなものになる。

思考の方法 分類する

全体を三つにグループ分けすると……。

❶❷のものと、ABのものに分けると……。



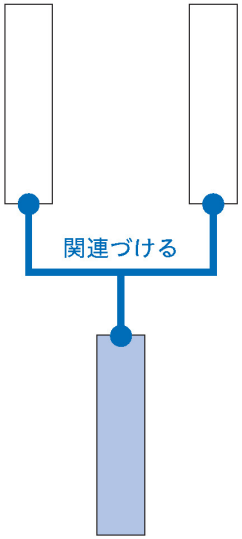


物事をグループ分けすることで、整理され、物事どうしの関係性がわかりやすくなる。分類する時には、観点を明確にする。

思考の方法 関連づける

○○と□□を関連づけると……。

○○と結びつけて考えると……。



あるものと、別のあるものとを結びつけて考えることによって、考えがより確かになったり、それぞれだけではわからない新しい考えや見方を得たり、新しい発想を生んだりする。

国語科に限らず他教科でも活用できる、**思考に関わる汎用的な方略**を取り上げています。

評論など**論理的な文章の読み方**を、注意すべき言葉などをあげながら解説しています。

論理的な文章の特徴
――評論文の読み方

私たちの身のまわりの論理的な文章には、説明文、論説文、評論文、解説文、意見文、批評文などがあります。ここでは、これら論理的な文章の代表例として評論文（以下、「評論」）を取りあげて、その読み方を解説します。

評論とはどういう文章か

ここでは、評論を「筆者が、自分の言いたいことを論理的に述べて、読者を納得させようとする文章」と定義する。この定義における「言いたいこと」とは、「考え」「意見」「主張」「評価」「批評」と言いかえることができる。また「論理的に述べる」とは、「筋道立てて述べる」と言いかえることができる。

評論の構成を捉えて読む

評論の筆者は、自分の言いたいことを読者に伝えるために、どのような構成で文章を書けばよいかに注力している。したがって、読む時には、文章の構成を捉えることが重要になる。

評論の構成は「序論」「本論」「結論」という三段の構成が基本である。ほとんどの評論は、「結論」が文章の最後に位置する尾括型である。ただし、「結論」が文章の最初にある頭括型の構成で書かれた評論もあるので、「結論は最後にある」と決めつけて読まないほうがよい。

言いたいことと具体例とを読み分ける

評論の筆者は、自分の言いたいことを、具体例やデータを示しながら述べていく。なぜなら、筆者の言いたいことだけが具体例やデータなしに一方的に列挙されても、読者は納得しないし、説得もされないからである。

したがって、読者は評論のどの部分が筆者の言いたいことで、どの部分がその説得力を高めるための具体例やデータなのかを意識しながら読めばよい。筆者の言いたいことをきちんと捉えたあとに、その説得力を支えている具体例やデータの妥当性、信頼性を吟味すればよい。

評論の筆者が説得力を高めるために用いる具体例やデータの根拠には、自分自身の体験や見聞、マスメディアやインターネットから得た情報、文献や書籍からの引用などがある。また、科学系の評論などの場合は、実験・観察・統計などのデータが、筆者の言いたいことの説得力を増すために重要な役割を果たしていることが多い。

「つなぐ言葉」に注意して読む

評論に限らず、文章は数多くの文が集まってできている。そして、その数多くの文が連なって論理の流れを作っている。この論理の流れをスムーズにするために使われているのが、「つなぐ言葉」、すなわち接続語である。

接続語に注意して評論を読めば、筆者の言いたいことがどこに書かれているのか、筆者が用いている具体例やデータはどこに書かれているのかなどが、捉えやすくなる。なぜなら、接続語は前後の文節や文をつなぐはたらき、すなわちその言葉の前後の内容の関係を明示する役割をもつからである。

接続語には、意味の上からみると、順接（したがって・だから）、逆接（しかし・けれども）、並立（および・また）、添加（しかも・なお）、選択（または・それとも）、転換（さて・ところで）、説明（つまり・要するに）などの種類がある。

順接　…したがって・だから・それゆえ
　この言葉の前の内容を根拠として、自分の結論的な意見を述べる。

逆接　…しかし・けれども・だが
　この言葉の前の内容とは逆の内容を示したり、前の内容を否定したり、反対の内容を述べたりする。

並立　…および・また
　この言葉の前と後の内容を対等な関係で述べる。

添加　…しかも・なお
　この言葉の前の内容に後の内容をつけ加える。

選択　…または・それとも
　この言葉の前と後の内容のどちらでもよいことを述べる。

転換　…さて・ところで
　今まで述べてきた内容や、紹介してきた内容から転じて別のことを述べる。

説明　…つまり・要するに
　今まで述べてきた内容を集約して述べたり、具体例や引用の要点をまとめて述べたりする。

これらの接続語に注目して評論を読むと、「ここから筆者の言いたいことが始まるな」とか、「ここからが筆者が示した具体例やデータだな」ということがわかったり、「ここで話題が変わるな」「ここで繰り返されていることが筆者の言いたいことにとって重要なのだな」、ということがわかったりする。

接続語に着目することで、評論は、ぐっと読みやすくなるのである。

本編教材の読み取りにおいても、適宜参照することができます。

「報道」「手紙」「記録」など、**実用的な文章の特徴・読み方**について、実例をあげながら解説しています。

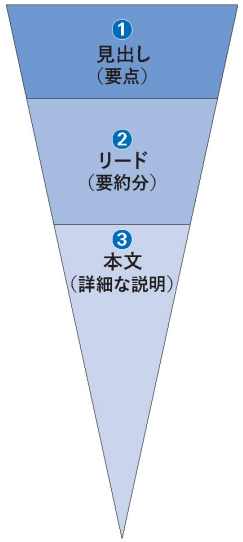
実用的な文章の特徴
――報道の文章

新聞記事などのようなニュースを報道する文章を、報道文と呼びます。年齢や職業などがばらばらの不特定多数の読者に向けて書かれるので、誰にでもわかるような書き方の工夫がされているのが特徴です。

新聞記事の構成

新聞記事の構成は、❶見出し（要点）・❷リード（要約文）・❸本文（詳細な説明）から成り立っているが（左図参照）、これらは、結論↓説明↓補足と、大事なところが先にくる、逆三角形型で整理されている。また、読者に記事の内容をすばやく、わかりやすく伝えるために、❹写真や❺グラフが活用される。

新聞記事の構成



❶見出し（要点）

記事の内容の要点を伝えるためには、短くかつ的確な言葉が選ばれる。

【例1】

食堂新メニューにBLTサンド決定
全校生徒アンケートで最多票を獲得
二〇××年度食堂委員会開かれる

【例2】

新メニューにBLTサンド
アンケートで最多得票
20XX年度食堂委

【例1】は一行めの文字数が多いために余白が少なく、息苦しい印象を与えている。加えて三行にわたって書かれているので記事の中心が見えない。一方【例2】は、原文の一部が省略されているが、これだけでも内容は伝わる。読者の読む意欲を引き出すために、見出しは簡潔であることが求められる。

❷リード（要約文）

リードは記事の要約文である。新聞記事においても5W1Hの基本形（いつ・どこで・誰が・何を・どのように）は必要条件である。例えば右の見出し例を使ったリードの例は次のようになるだろう。

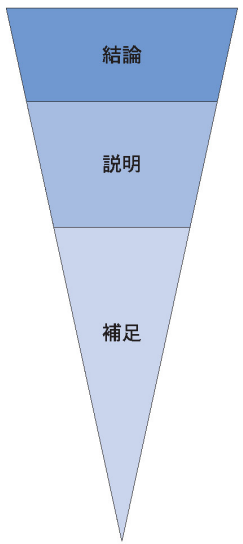
「昨日行われた二〇××年度食堂委員会において、食堂の新メニューにBLTサンドが決定した。九月に行われた生徒アンケートで最も多くの要望が寄せられたメニューであることが決め手となった。二学期中間試験後からの販売となる。」

小さな記事の場合は見出しのあとにすぐ本文がくる。その場合、第一段落がリードの役割を果たす。

❸本文（詳細な説明）

本文の組み立ても逆三角形で書かれている。

本文の組み立て

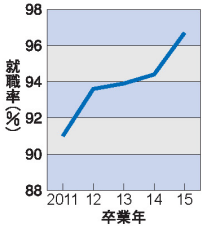


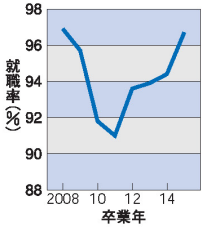
❹写真

どのような写真を選ぶかや写真の見せ方などによって、記事で述べたい観点がうかがえる。

❺グラフ

グラフも写真と同様、どのような観点で切り取られているかが重要となる。





例えば右上のグラフは、二〇一一年から二〇一五年までの、大学生の卒業時における就職率を示したグラフである。ところが、右下のグラフのように時間軸を伸ばして見た場合、受ける印象は大きく変わってくる。就職率はただ単に上昇を続けたのではなく、二〇〇八年の水準まで戻ったのである。また、仮に右上のグラフの縦軸を伸ばすと、より急激な上昇を強調することもできる。情報は扱い方次第なのである。

写真や図などの**文章以外の読み取り方**についても、簡潔にまとめています。